



利尻山は、白亜紀～新第三紀中新世の基盤岩上に形成されました。利尻山は北海道北部の日本海上に位置し、浸食の進んだ成層火山体と、多くの側火山から構成される第四紀複成火山です。

火山の活動は、基盤岩上に約20万年前以降に開始しました。これらの噴火活動は、大きく初期・最盛期・末期の3つの活動期に分けられています。

初期活動では、標高1,300mほどの安山岩成層火山体とデイサイト溶岩ドーム群がそれぞれ島中央部と山麓に形成されました。

約4万年前の最盛期になると、玄武岩・安山岩・デイサイト溶岩流（沓形溶岩流・種富溶岩流）が短期間に多量に流下し、沓形岬や富士岬を形成、また標高1,800mほどの成層火山体を形成しました。

末期活動では、玄武岩およびデイサイト・流紋岩マグマが、少なくとも14ヶ所の噴出中心から少量噴出する活動へと変化しました。山頂からは約2万8,000年前に野塚溶岩流（玄武岩）が流れて野塚岬を形成しており、山頂に露出しているロウソク岩はこの時の火道と考えられています。その後の噴火は、南東山麓を中心に、玄武岩マグマによる割れ目噴火、マグマ水蒸気爆発（沼浦マール）など多様な噴火活動が起き、8,000年ほど前まで継続したと考えられています。

現在では、火山活動を示す兆候は一切認められておらず、寿命を終えた火山の可能性が高いようです。活火山の定義については、過去1万年前までに噴火した山を対象としていますが、利尻山についてはランクCに該当しています。

側火山の区分

溶岩ドーム群 鷺泊ポン山、ペシ岬、夕日丘、ポンモシリ

スコリア丘 仙法志ポン山、鬼脇ポン山、アララギ山、オタトマリポン山、メヌウショロポン山

マール 沼浦オタトマリ沼、南浜メヌウショロ沼



ポンモシリから夕日丘・ペシ岬を望む



沼浦マール



山頂付近のロウソク岩

野塚溶岩流を噴出した火道の跡で、固まったマグマの通り道のみが残されてきた岩です